

# 杜の正体

## ドームから三ツ島神社まで

2度目のなみはやドーム見学後、次の取材地・三ツ島神社を目指す。なみはやドームのある門真南駅周辺はまだまだ開発途上で、重機が掘り起こしたままの起伏が至る所にあり、見通しが悪い。目的の三ツ島への方向も道がふさがれており、駅周辺をぐるりと迂回するようなルートをとらざるを得なかった。

私事だが、取材を進めるうちに風邪が悪化してきており手足の関節が痺れるような状態だったので、たいした迂回距離ではなかったのだがこの遠回りは恨めしかった。

……門真南駅のターミナルには大阪駅行きのバスが発車待ちで停まっており、「ああこれに乗って帰ろうかなあ」と思ったくらいだったのだ(しかし途中で気分が悪くなって降りることになるとそっちの方が厄介そうだったのでヤメた)。

さて、なみはやドームの横顔を眺めつつ、将来は第二京阪道路となる予定の土地を歩く。地形図を見ると元々は田圃がひろがっていたと思われる。灌漑技術が発達する以前は門真名産のレンコン畑だったのだろう。



## 三ツ島神社

道路予定地から残された集落の先に杜が見え始めた。まさに鎮守の森といった風で遠くからでもよく見える。

近づくにつれ周囲の民家も何かしら歴史を感じさせる佇まいとなり、そしてその杜の大きさに圧倒され



る。神社の敷地横にはだんじりを格納する大きな倉庫があり、神社を中心に祭りなどで地域の繋がりが残っている土地だと感じることができる。

目的の三ッ島神社の境内に入ると、杜はたった二本の木で構成されていることに気づく。

とくにご神木になっている薫蓋樟(くんがいしょう)と呼ばれる楠は巨大だ。敷地を覆い尽くすばかりの大木である。大阪府では最も大きな樹らしく「大阪緑の百景」の第1位である。

この木は国の天然記念物にも指定されていて、樹齢は 1000 年、高さ 25m 以上、幹の周りが 14.6m ある。14.6m といえば10人くらいが手をつないで一周できる長さであり、とてつもなく大きな太い木であることが理解できると思う。また枝の張りも広範に拡がり東西南北に 30m 伸びている。その昔は枝先が境内からあふれ、周囲の民家や道路を覆っていたらしい。今では枝先は払われてはいるものの、樹木そのものの生命力は旺盛で、切られた横端からどンドンと枝を伸ばしていつているように見えた。春になれば新芽が芽吹き、夏になれば葉が生い茂り周囲に涼をもたらす存在となるのだろう。

上空から境内を覆い尽くしている様を見てみたいものだと思った。





三ツ島神社は、この薫蓋樟に圧倒されて他に覚えていることも少ないのだが、一応…

三ツ島神社の縁起は楠木正成の孫・正澄が、幕府の追求を逃れるためこの地で身を隠していた頃に、楠木家が崇拝する山王権現をまつて氏神としたのが始まりだそうだ。



## 三ツ島と二島

取材の始まりに門真南駅で周辺の地図を見ていたとき、Tさんが指摘した地名に関する不思議がある。

三ツ島神社付近には、二島小学校や公民館二島分館、JA門真市二島支店など「二島」を名乗るものと、三ツ島神社をはじめとして上三ツ島公民館、下三ツ島自治会館など「三ツ島」を名乗るものがある。二丁目三丁目のように切り分けがされているわけではなく混在しているようで、しかも「一」が無いのだ。

取材中、この謎は解けなかった。

門真市駅へ向かうバスを待つ間、地元の人と思われるおばさんと一緒になった。普段なら「謎は地元で聞くの原則」で質問するところだが、このとき体調が最悪で、立ってられないような状態だったので聞き取りができなかった。

後日、ネットで調べたところ、どうやら現在の地名としては「三ツ島」のようだ。なみはやドームの所在地も門真市三ツ島、二島小学校の所在地も三ツ島だった。

では「二島」とは？これは明治 22 年の市制町村制によってできた村名のようだ。「二島」の由来は元々あった「三ツ島」村と「稗島」村の、「島」がつく村が二つが合併したことに由来するらしい。それから 67 年後、「二島」村は門真町に編入し、「二島」の村名は消失。もともとの村名であった「三ツ島」は地名として現在も残っている……ということらしい。(門真市職員労働組合 HP より)

三ツ島神社の薫蓋樟は三ツ島村から二島村へ、そして門真町・門真市の三ツ島への変化をのんびり眺めていたことだろう。

